創 傷 と 兇 器 に つ い て

岡山大学医学部法医学教室（主任：三上教授）

神	田	瑞	穂
本	位	田	甲 子 郎
浜	田	稔	雄
板	阪	康	夫
船	曳	定	雄
松	島	九	郎
白	神	清	敏

〔昭和 32 年 11 月 11 日受稿〕

緒 論

創傷から兇器の推定をすることは法医学鑑定に際して究明せられるべき極めて重要な課題であることは今更論を俟たない。そしてその解明によつて単に致傷器が何であるかが判るのみならず、その創傷が自為によるものか、他為によるものか更には偶発的災害や過失によるものかの鑑別をするうえに役立ち、あるいはまたときには兇器の所有者が如何なる職業のものであるかを推定する根拠にもなりうるのである。

しかしながらこのように重要な問題—創傷からの兇器の推定—は現在でも尚誰にでも容易に解決できる問題ではなく、唯損傷の形、長さ、創角、創縁、創面、創洞、創底等の性状、骨折の有無等から鈍器か鋭器か刺器か銃器による損傷かの区別は比較的容易に出来るが、鋭器の中にも大形のもの、小形のもの、重量のあるもの、軽いもの、柄のあるもの、ないもの等千差万別で、しかも同一兇器でも使用方法によつて傷の性状を異にするので、損傷の形状から兇器を適確にあてるといことはやはり至難のことである。

然して赤石教授¹⁾が「悩まされた兇器鑑定例」の中で「殺人あるいは傷害等の事件の場合、鑑定資料として鑑定人に提示される兇器は捜査側としては殆ど疑問がないものであつても鑑定人としては、その創傷の状況等と対

照してみても疑問をいだかざるを得ないことが少なくない」と述べているように、ある兇器（血痕等が附着して致傷器に間違いないと思われるような）と、それによつて生じたと思われる損傷とを疑いなく結びつけることもまた容易ならざることである。

そのためには出来るだけ数多くの兇器とそれによつて生じた損傷とを見ておくことが必要で、先般警察庁鑑識課²⁾から発行されてた「創傷と兇器」とか、千葉大の宮内助教授³⁾が最近の犯罪学雑誌のグラビヤに出されている写真等はその意味できわめて有意義なものと考えられる。

〔事 例〕

私達が最近従事した鑑定例のなかで 3 例を選んで若干考察を加えて見た。

I. 創傷から兇器の推定が困難であつた

1 例

本件は某市の色街の真中でおこつた喧嘩による単なる傷害致死被疑事件であり、22才の被害青年の死因は脳挫傷で、とりわけ珍しい事件ではないが、該創は写真 I にみられるごとく右前額部、右眉毛内端より約 1.1 ㎝右上方の部に、小指頭大の淡赤褐色の表皮剥脱を伴つた変色部があつて、その略々中央に、右上方から左下方に斜走する長さ約 1.2 ㎝の創傷があり、創縁、創面は共に略々整、創角

写真 I

は上下共略々尖鋭で創洞には組織片の橋架等なく、創底は頭蓋腔内に達している。

さらに頭皮を翻転剝離して頭蓋を曝露するに、写真Ⅱの如く、右前頭骨に陥没骨折があつて骨片が遊離しており、その陥没部は辺縁不整なひょうたん形で底部が下方にあつて略々縦置き、左右径は広き部は約 0.9 ㎝、狭き部は約 0.7 ㎝、後上端は巾約 0.3 ㎝、上下径は約 1.4 ㎝で脳膜を傷つけ大脳右半球に及んでいる。

写真 II

また写真Ⅲにみられるように、右側頭部中央より右頬骨部に向い、後上方より前下方に斜走する長さ約 10.5 ㎝の擦過截痕が存在し、上創端は右耳介上端附着部の約 5.3 ㎝後上方に位置し、上創端に近き部(約 0.5 ㎝長の間)のみはやや深く、深さ約 1.8 ㎝で、創底は骨膜上に達している。

以上のような創傷の性状—とくに頭部に骨を刺通し、脳質まで損傷している—から考えると何か尖つた特殊な刺器か尖の小さい割器が推定できるが、頭皮に貫通創傷を与えうる用器としては普通は円錐またはこれに類する形状の尖器か、細長い有刃尖器かであり⁴⁾、

いづれにしてもかなり長い柄(あるいは把部)を有することによつて生ずる大きな運動のエネルギーで致傷部に作用して始めて出来る創傷であるから、したがつて推定される兇器としては鉄火箸様の柄をもつて先に刃を有するものか、消火につかううち鉤か、魚屋や運送屋のもっている手鉤の類が考えられたのであつた。ところが被疑者が実際に使用した兇器は実は写真Ⅳに見られるような、まことに小型の兇器であつたのである(下の写真)。

すなわち、鉄製ではあるが重量は僅か20gたらず、全長約 7.0 ㎝(手拳の中は約 8.0~9.5 ㎝)一端はやや鋭利な刃部で巾は約 0.5 ㎝、他端(背部)は水平で長径約 0.4 ㎝の不整円形を呈する大工用の「のみ」に類するものであ

写真 III

写 真 IV

の長さは約0.8 匁であり、写真VIIの兇器である鋸の歯の部分の巾がまた約0.8 匁であつた。兇器である鋸の全長は約87.0 匁、鋸歯部の全長は約41.5 匁、1つ1つの鋸歯部の巾は約0.8 匁、歯の数は69、勿論刃部の中央は目があらく、両端ほど目がつんでいる。

本創は典型的な鋸歯創であつて、容易に兇器を推定し得た1例である。

写 真 V

つた。

果してこのような兇器で前述の創傷をよくなしうるや甚だ疑問を持たざるを得ないのが普通であるが、被疑者の日常生活をさぐるに及んで成程と合点が行つたのである。というのは、被疑者は幼時右手の中環および小指を失い、したがつて右手は拇指と示指のみであるが、職業は煉瓦製造職人で、右手掌と示指とで写真IVのような刃物を支持し、背部を拇指で強圧することによつて煉瓦を刃部で切ることを10数年來やつて来た男であり、そのために前記のような小型の兇器も、右前腕が柄の動きをなし、致命傷を与えるに至つたもので、被疑者の特異な生活状況がわからなければ容易に眞の兇器を判論できなかつた1例である。

II. 創傷から兇器の推定が比較的容易であつた1例

本件は、不良性を帯びた放蕩息子を父親が細紐を頸に巻きつけて絞殺した事例であるが、写真Vにみられるごとく、死因とは無関係な創傷が右頭頂部より右前頭部にかけて存在し、頭髮を剪除すると写真VIのごとく所謂鋸歯状の創傷であつて、長さは約7.8 匁、略々前後に縦置せられ、前創角は右前額部髮際に接して略々整鋭、右創面は鋭薄、左創面は鈍降し、創底は深き部は骨膜に達し、浅き部は頭皮下組織間に終る。

而して右創縁の歯状部一山の部分の全長—

写 真 VI

写真 VII

Ⅲ. 兇器の峯の巾と創傷の長さとの關聯性について

創傷とくに刺創がみられた場合、創の長さ、創角の性状、巾等を計測することによつて兇器の刃の長さ、したがつて兇器の大きさ、形等を推定するわけであるが、Mueller⁵⁾もその

写真 VIII

写真 IX

書の中で、刺創々長より用器の巾を判断することは一般に困難であり、両者の關係が不当にくいちがう場合にのみ、その用器を否定し得るとのべている。松裏等⁶⁾は刺創々口とその成傷器の大きさについて考察を加え刺創の創縁接着長はほとんどつねに用器の刺入部の巾より大で、その比は平均1.36であると報告しているが、割創の場合には創傷の長さと兇器の刃部の長さとは略々一致するようである。

写真VIIIにみられる左胸部の刺創は長さ約3.0 匁、上創角の巾は約0.3 匁で、左第五肋間並に第六肋軟骨部を穿通して胸腹腔に入り、横隔膜並に肝臓を刺切して心臓左心室に刺入する刺創で、創深は全長約11.0 匁を算している。

そこで、本創を形成する兇器として巾 3.0 匁内外、刀背の厚さ 0.3 匁内外、長さ 11.0 匁前後を有する片刃の刃器が推定されたのであつたが、本創の兇器は写真IXおよびXの如く、長さ約10.2 匁、巾 3.2 匁、刀背の厚さ約0.5 匁の片刃のいわゆる出刃庖丁であつて、創傷から推定した刃部の巾と略々一致したのである。そこで考えられることは刃器の峯の巾が広く、刃部の巾が大きく、刃部の長さが短かければ短い程割創の性状に類似して来て、刃器の刃部の巾が創傷の長さと一致するに至るのではなからうかと。

以上を要するに創傷から兇器の推定をすることは極めて至難なことであつて、この解決には出来るだけ数多くの事例について見聞をひろめることと、同時に一つ一つの事例について細心な觀察を加えること以外にはない。

〔結 論〕

創傷から兇器を推定することがきわめて困難であつた例ときわめて容易であつた例についてのべ、さらに刃器

写真 X

の峯の巾が広くなるほど、刃部の巾と創傷の長さとは一致してくるということについて実例をしめた。

此の論文は一部は昭和32年6月、第41次日本法医学会総会において発表した、全部については昭和32年11月、第4回中国法医学識懇話会において発表した。

擧筆するにあたり指導、校閲をいただいた三上教授に深謝する。

文 献

- 1) 赤石英：法医学の実際と研究，南江堂，1，16頁（昭和29年）。
- 2) 警察庁刑事部鑑識課編集 創傷と兇器，文唱堂（昭和32年）。
- 3) 宮内義之介：犯罪学雑誌，23巻，1号，16頁，2号グラビヤ，3号グラビヤ（昭和32年）。
- 4) 金沢源一：「法医学の実際と研究」南江堂，Ⅱ巻，50頁（昭和29年）。
- 5) B. Mueller: Gerichtliche Medizin, Springer, 247 (1953)。
- 6) 松裏道彦，折野耕造：科学と捜査，9巻，155頁（昭和31年）。

Trauma and The Used Weapons

By

Mizuho KANDA
Kosiro HONIDEN
Naruo HAMADA
Yasuo ITASAKA
Sadao FUNABIKI
Kuro MATUSIMA
Kiyotoshi SHIRAKAMI

Department of Forensic Medicine, Okayama Medical School, Okayama, Japan

It is very difficult to prove that a weapon has been used for the production of a wound generally, and we are observed three wounds, one punctured wound by an instrument, other cutting by a saw in the head and another stab wound of chest by a shape weapon.